

関 雅夫さん（平成 22 年 3 月）

## カサブランカ便り「イスラム教とモロッコ人気質についての私的考察」

拝啓、日本はそろそろ桜の季節だと思いますが、私もここモロッコのカサブランカに赴任して早5ヶ月以上が経ちました。

今年もう4月、月日の経つのは早いものです。カサブランカはハンフリー・ボガードとイングリッド・バーグマンが出演する映画「カサブランカ」で有名な場所です。1942年に制作、公開されたアメリカ映画で白黒映像ですがいいですね。既にカサブランカで買ったDVDを10回くらいも見ています。

それから、カサブランカのシンボリックな存在といえば、やはりハッサン二世大モスクです。これは高さ約200メートルの大きな塔（ミナレット）を有するイスラム教の大寺院（グランモスク）で大西洋を背に壮大にそびえ立っており、中に入ると実に雄大です。イスラム教は偶像崇拝を禁じているので、モスクの中にはキリスト教の教会とは異なり、像のような物は一切ありません。

私のここでの毎日は、日の出前、アッラーの神へのお祈りの時間をムスリム（イスラム教徒）に告げるアザーンの音で目覚め、また少々寝てから起床するというものです。このアザーンの音はモスクから一日に何回も鳴り響きます。

カサブランカは日本の九州の南、種子島くらいの緯度のため、街中を歩くともう日本の初夏のような気候になっています。スプリンクラーが完備され、綺麗に整備された近くの公園内を散歩していると、日本の鳩より少々小さな雄の鳩が雌の鳩を追い回しているのを目にするようになりました。また、さまざまな色のスマレの花等が咲き乱れるなど、ここモロッコの動植物も恋の季節、春爛漫のようです。ちなみに、花粉症はモロッコにはないようで、マスクをした人は見られません。宗教上の理由から、目だけを出して他はすべて布で覆った女性、頭をスカーフで覆った女性や、男性では頭に独特の帽子を被りジュラバという足首迄届くワンピースのような民族衣装を着た人達が公園内を散歩しています。公園内をジョギングしたりエアロビクスのような運動していたり、若い男女がベンチでデートを楽しんでいたりと、日本の公園の様子と大差ありません。私もこの時期になると罹る花粉症からここでは開放されるので春のカサブランカを満喫しています。どうやら、花粉を撒き散らす杉のような樹木はモロッコにはないようです。

屋内に目を向ければ、コンクリートの建物の中は割りとはひんやりとしています。モロッコでは、冬でも室内は暖かい日本のマンションとは違って大変寒く、カサブランカで一番寒い1月などは我が家（マンションの1室）の室内も夜は深々と冷えこみます。昨年12月にモロッコの奥地から我が家に遊びに来たJOCV（青年海外協力隊）隊員も、「冬はとにかく寒いので、早くこの寒さから抜け出したい」と言っていました。このJOCV隊員はなんと冬の北海道のような格好で我が家を訪れたので少々びっくりしました。冬になると内陸部は大変寒いので、湯たんぽを抱え込んで過ごすといった話も耳にします。幸い、カサブランカは大西洋に面しているのも、海の影響からか内陸部ほどは寒暖の差は激しくありません。近くに住んでいる同じSV（シニア海外ボランティア）の方も冬の間は一度しか暖房を入れなかったそうです。このような気候から、我が家には暖房器具は何もないので、寒いときにはセーターや重ね着をして冬を乗り切っています。

さて、私のモロッコに来たときの様子を少しご紹介しましょう。JICAよりモロッコに派遣され、昨年の9月29日にモロッコの首都ラバトに到着、ラバトに1ヶ月と数日滞在、フランス語の学校に行きながらホームステイをした後、平成21年11月3日にカサブランカに柔道SV（シニア海外ボランティア）として赴任、市内の色々な道場を巡回して指導してきました。

赴任にあたって、神奈川県松沢成文知事より「かながわ地球市民メッセンジャー」を、相模原市の加山俊夫市長より「相模原市民海外レポーター」をそれぞれ委嘱されましたので、初回は柔道SV（シニア海外ボランティア）として赴任の挨拶を、第2回目は「イスラム教とインシャアッラー」というテーマで海外レポーターとして拙文をお送りしました。今回、第3回目は「イスラム教とモロッコ人気質」というテーマでまた拙文をお送り致します。

関 雅夫さん（平成 22 年 3 月）

ムスリム（イスラム教徒）は一日5回（日の出前、朝、昼、午後4時前後、夕方になるのでしょうか、日の入り後間もなく経ってから）のお祈りをアッラー（イスラム教の唯一絶対神、そもそもアッラーというのはアラビア語で神を意味します。）に奉げます。

お祈りの前には必ず、水で頭、手、足等々を清めます。一緒に柔道を指導しているモロッコ人柔道指導員が我が家に遊びに来た時に、午後の3時半頃でしたかトイレを貸してくれと言われたのでトイレを貸しました。この指導員はトイレ終了後に我が家でお祈りを奉げていました。その後私がトイレを覗いてみるとトイレの中にはお清めの名残の水の跡がありました。日本では水浸しは気になるものですが、こちらは乾燥地であることもあり、あまり気にならないようで文化の違いを感じました。

余談ですが、カサブランカの道路上には結構ゴミが散乱しています。食べた包み紙を路上にポイ捨てにして後始末をしない人が多いようです。食べられるポイ捨てゴミ、残飯は街中に数多くいる猫が食べて始末する生態系が出来上がっているようです。

また、交通の状況も日本とは異なり、例えば交差点で信号が青になってもすぐに発進しない車に対しては、間髪を入れず後ろの車が警笛を鳴らすことが普通です。運転が荒く、事故や接触も多いので、走っている車は殆どがどこか凹みがあります。また、走っている車の前後を、高速道路でさえも人々が横断していて危険極まりなく、また、高速道路の横を馬車がのんびりと走るなど日本ではとても信じられない光景も目の当たりにします。私自身もプチタク（小型のタクシー、大型はグランタクシーと言います。）で柔道指導の帰途、急に飛び出て来た自転車と軽い接触事故に遭いました。夜でもヘッドライトを点けていない車が走っているため、ボンヤリ道を横断していると車にはねられてしまいます。ここでは自動車は右側通行のため、私が道路の右側を歩いていたところ、後ろから来た車のバックミラーに一度接触された事があります。この接触事故に遇ったため、それからは注意して日本と反対の左側の路上を歩くことにしています（歩道のある道路では勿論左右関係なく歩道を歩いています。）。交通事故に遭ったのであろう若い人が松葉杖を突いて歩いているのも散見します。また、モロッコに着いて暫くの間フランス語学校に通っていた首都ラバトでも、ここカサブランカでも猫が車にはねられている光景を時折目にします。モロッコは歩行者よりも車が優先の社会で、日本のように横断歩道を歩いても車は止まってくれません。

このような交通事情のなか日本車を数多く目にします。スズキ、ホンダ、ニッサン、トヨタ、ミツビシ、イズス等々、モロッコでは日本車は優秀だとのもっぱらの評判です。それから道路を歩いているとモロッコ人からしょっちゅう「ニイハオ」とか「シノア」とか声を掛けられます。アジアはあまり馴染みがないのか、アジア人を見ると中国人だと思うようです。また、私を見て両手で拝むような格好をされる事もよくあります。仏教の国から来た人とも思うのでしょうか。極々稀ですが「サムライ」と声を掛けられることがあり、これが一番心地よく私の心に響きます。

それからよく信じている宗教についてモロッコ人から聞かれます。信心深いモロッコ人にとって無宗教というのは想像がつかないのか、無宗教と答えるとあまり印象がよくないと聞いているので、実家が曹洞宗であることから「ブディスト」と答えています。私が柔道を指導している弟子のムスリムの一人は「アッラー」以外は神ではない、「アッラー」が唯一絶対神だと言っていました。自分の信じている神様が一番だと思う気持ちはよくわかりますが、それが行過ぎれば他の宗教に寛容ではなく排他的になるなど大きな危険を伴うことは宗教戦争など過去の歴史が証明している通りです。宗教、政治の話しについてはとにかく誤解や対立が生まれがちなのであまり触れないようにしています。

余談が長引いてしまいました。私が指導しているカサブランカ市内のある道場では柔道の稽古は午後7時から始まることになっています。私はいつも6時半前には道場に行って、愛しの愛弟子たちを待っているのですが、残念ながら定時である7時に始まったことはいまだかつて一度もありません。

暫くの間はなぜ定時にピタリと集まらないのか、集まらないで何をしているのか全くわかりませんでしたが、実は夕べのお祈りが柔道の開始時間と重なるため、お祈りを奉げた後にパラパラと道場

関 雅夫さん（平成22年3月）

に来るということがわかってきました。運転中などでお祈りが出来なかった人は、道場の脇に敷物を敷いて敬虔なお祈りを奉げています。また、敷物を持ってない人は道場内で同様に何やら口ずさみながらお祈りを奉げているようです。大体10分くらい、時には30分くらいもお祈りを奉げている人がいるので、ある日、「プールコワ?(なぜですか?)」と聞いてみました。そうすると「パルスク(なぜなら)...」ということで、実はその日にまだやっていなかったお祈りがあったので、それも含めて数回分のお祈りを一度に奉げていますとの答えが返ってきました。ラマダン(断食月、日中は一切の飲食を禁止するムスリムの戒律)も同様で、いろいろと事情があってラマダン月に断食出来なかった人は、他の出来る日に繰り延べてやることも可能とのこと。お祈りや断食といったイスラムの戒律は厳格ではあるものの、実際には柔軟性も併せ持っているようです。

信心に欠ける私の目から見ると朝夕と一日5回のお祈りは大変なように思われます。当初はクリスチャン(キリスト教徒)のように一週間に一回、日曜日にでもまとめてお祈りをすれば良いのにと思いましたが、実はこの5回のお祈りに大きな意味があることに気づきました。モロッコの食事は油が多いこってりした料理が多いので、運動しないでいるとブクブクに太ってしまう危険があり、そればかりか糖尿病のリスクも高いように感じます。アッラーの言葉を伝えた預言者ムハンマドは商人の出身だったそうで世間知に長け、また柔軟性も併せ持った人物だと聞いています。イスラム教のお祈りの作法は立ったり座ったり、頭を下げたりと実に様々な動作を繰り返す非常に動的なものです。肥満しやすい食事を取っている民衆に対し、一日5回、前述のように、日の出前、朝、昼、夕方、日没後間もなく捧げるアッラーへのお祈りは同時に適度な運動でもあるように思われます。

また、お祈りの前には毎回体を清めるので、日常的に清潔を保てるという生活の知恵も含んでいるようです。その上、一年に一回のラマダン月では体に溜まった脂肪等も抜けるのでダイエットにもなり健康な生活を送るのにはとても良いように思います。日本でも最近、断食療法が健康によいと聞くことがありますが、イスラム教では何百年も前から戒律のなかで断食を実践してきたのです。さらに、ラマダン月にはどんなに富んだ者でも空腹感を味わうので、貧しい人達の立場が一時的であっても理解できるといいます。そのため、自然と貧しい人達を思いやることができるようになり、喜捨(貧しい人達にある程度裕福な人達から物を分け与える)の精神の発揮にもつながります。

余談ですが、愛弟子達が道場に稽古に来ると師匠の私が弟子達に「アッサラームアレイコム(平穩をあなたに、こんにちわの意味)」とアラビア語で挨拶します。弟子達は「ワレイコムアッサラーム(あなたに平穩を、同じくこんにちわの意味)」と言って私の頬の右、左と男女を問わず接吻をしてくれます。珍しく9歳と13歳の女兒が稽古開始時間前早々、なんと6時半前に道場に來たので挨拶と接吻をした後、「君達はお祈りはしないの?」と聞いてみました。全然お祈りをしないと、少しかだけやるとの答えが返ってきました。「プールコワ?(なぜ?)」と聞きましたところ、子供にはやはり大変とのこと。同じムスリムでも子供は学校もあるので、お祈りの戒律をそれほどは厳格に適用するわけではないように感じました。

そういえば別の道場で、午後3時頃から始まる少年、少女達の柔道指導でも4時頃になると指導員たちは道場の端でお祈りを奉げていますが、子供達は柔道が続いています。このような大人と子供のお祈りへの対応の違いも、イスラム教の持つ柔軟性と包容力の賜物なのかもしれません。別の例になりますが、モハメッド5世ナショナル道場に柔道の形の指導に出向いた際には、モロッコ全土から集まってきた女性の柔道指導員達と一緒に写真を撮って欲しいとの申し出を受けました。イスラム教では女性から配偶者以外の男性に何かをお願いすることはあまりないと聞いていたので少し驚きましたが、どこにでも例外はあるようです。日本人の指導者から柔道を直接指導される機会はめったにないので記念にしたかったのでしょう。

さて、これら私の身近な経験から鑑みるに、預言者ムハンマドは商人の出身だけあって、実に柔軟性に富んだ合理的な考えの下に、アッラーのお言葉を広めたものだと感服します。イスラム教は宗教ではありますが、日常生活に密着しているので宗教を超えた社会システム、つまりイスラム社会として捉えるという考え方も聞いたことがあります。やはりその土地の風土、住んでいる人の気質、食生活等々からこのような文化が生まれ、育ってきたのではないのでしょうか。

関 雅夫さん（平成 22 年 3 月）

また、これと関連してなのか、違うのかはわかりませんが、モロッコ人は感情豊か、直情径行型なところがあるように感じます。私がある道場に柔道の指導に行った帰りのことをひとつ例に挙げてみたいと思います。私を乗せて運転していた柔道の指導員が突然車を下りて、交差点の路上で何やら反対側から来た相手の車に乗っていた人と口論を始めました。聞けば些細なことで喧嘩しているようです。口論が収まったあと、レストランに連れて行って貰ったのですが、今度は別の指導員が店員とこれまた些細なことで揉め始めました。話を聞いてみると、モロッコでは口論から直ぐ頭に血が上り、大きな石を持って殴りかかったりすることもあるとかで、喧嘩となるとお互いに興奮して前後の見境がなくなることも多いそうです。

そういえば、こんなこともありました。女性のJOCV(青年海外協力隊)隊員で柔道をする方がいるので、この女性隊員と一緒に柔道の指導に行きましたが、黒帯の日本人女性ということもあり大変な人気でした。そして、モロッコ人男性の柔道指導員が、「自宅でモロッコ料理の定番であるクスクスをご馳走するから隊員と一緒に来てくれ」、「その次はその女性隊員だけで食べに来てくれ」、挙句の果ては「女性隊員と結婚したい」云々と言い出しました(この女性隊員からは、指導員と付き合い気は全くないとの明確な意思表示があったので断りの仲介をしました)。指導員のほうもしばらくは悲運を嘆いていたのですが、そのうちに熱も冷めてけろっとしていました。ここでは、万事につけて熱しやすく冷めやすい、別な言葉で言えば、物への執着やこだわりがない人が多いのかなあと思ったことでした。

例えば私が指導している道場で、私が柔道の寝技で押さえ込むと直ぐに参ったと合図をする愛弟子が殆どで、ある意味あきらめがよく、技を返そうとしたり反撃したりという執着がないように感じます。前述の適わぬ恋に陥った指導員も私と柔道すると投げられるので嫌がって私と柔道をやらない、私が柔道をやろうと言うと何だかんだと言い訳ばかりで逃げ回るなど、どうも努力しようという気概に欠けるというか、根性に忪るようにも感じます。この指導員は柔道の基本である受身すらも嫌いなものだから困ったものです。

私が指導している愛弟子達の人柄はいいのですが、地味な受身が嫌いだったり、投げられると痛いので私から逃げていたり、どうも押しなべて勝負に対する執念と根性に忪っています。

柔道の指導を通じて、こんな気質がモロッコ人には結構多いなあと感じるに至りました。前述の例ではありませんが、女性に対して直ぐにカーッと頭に血が上り、恋の炎がバァッと燃え上がる気質が男性に多いため、女性は男性を刺激しないよう手、顔以外は肌を布で覆うなどの文化が生まれて来たのかもしれないと浅見ですが思ったりもします。

また、イスラム教ではお酒を飲むことを禁止していますが、前述のように興奮しやすい気質の人達が多いたことから、預言者ムハンマドが心配して、「お酒なんか飲むな、お酒なんか飲んだらお祈りも忘れてしまうし、そもそも何を仕出かすか分かった物ではない。それこそ身の破滅になる」と考えたのかもしれない。

やはり何ごとともその国、その土地、その地域の特質、風土、住民達の気質、風習等々から長い時間をかけて、機能主義的に文化全体が決まってきたのでしょう。ダーウインがビーグル号でガラパゴス諸島を探検、同一種の生き物が様々な環境下でそれぞれ適応、順応して進化して行くことを説明した進化論のように、人間もいろいろな文化の中で精神面でも「進化」してきたのかもしれない。

ちなみにモロッコの柔道場は柔道連盟の本拠地があるカサブランカのモハメッド5世ナショナル道場でさえ柔道専用の道場ではありません。柔道、合気道、筋肉トレーニング(筋肉トレーニングマシンが置いてあります)との共用です。私がカサブランカ市内を指導している道場も経営的には柔道だけでは成り立たないため、合気道、テッコンドウ、エアロビクス、筋肉トレーニング、ランニング等々と一緒に使われています。この様な環境による影響なのか、あるいは、このような環境下で柔道せざるを得ないためなのか、私の見た範囲ではモロッコの柔道は武道というよりもエアロビクス、筋肉トレーニングの影響を受けたスポーツ的な柔道に変貌してしまっているようで、本来の「日本傳講道館柔道」からかけ離れてしまっていることは残念でなりません。本来の柔道では自然体での体捌きから攻防を行うべきなのですが、試合の様子などを見るとどうやら違う柔道になってしまっ

関 雅夫さん（平成 22 年 3 月）

います。ちなみに、私の師匠である大澤慶巳先生（十段）は現役時代、全日本柔道選手権大会等々で65キロの小さな体で100キロ以上の大男を軽々と投げ飛ばしていました。また、私の柔道部現役時代にも大澤先生は130キロ位ある柔道部員をそれこそ紙を舞わせるごとく軽々と投げ飛ばすので我々柔道部員達の憧れの的でありました。私も立教高校の柔道部で55キロしかなかった頃には大澤先生からモヤシと言われましたが、130キロ位ある柔道部員を巴投げで投げ飛ばせたことが自信となり、「柔善く剛を制する」柔道の魅力の虜になりました。爾来、柔道を本格的に始めて45年が経ち、今日に至っています。

今回の赴任では、本来の柔道とは違う方向に進みつつあるモロッコの柔道を是正すべく、尊敬する宮本武蔵の心境で単身ここに乗り込んできたというわけです。ここでは柔道本来の正しいあり方、正統性を保ちながらも勝ち続けることのできる柔道を目指したいと思っています。例えば、全日本選手権を9連覇し、ロスアンゼルスオリンピック金メダリストの山下泰裕選手は自然体からの正統な柔道で勝ち続けましたが、そのような理想の柔道こそが最後には強いのだということをもロッコ人に教えることが私の使命です。武道ではなくスポーツ指向、つまり技の切れではなく単なる腕力やスピードのみに頼った柔道では、たとえ一時的に勝つことはできても、柔道本来の技の高み、円熟にまで至ることはできません。そのような柔道は言葉を変えれば滅び去って行く邪道、邪剣としての武道です。柔道本来の自然体からの作り（相手を崩すこと）と掛け（自分の技を施すこと）からなる正統な柔道をモロッコで根付かせるのは、大変な仕事になると覚悟しています。しかし赴任してきた以上は何とか努力し、柔道本来の姿に統合すべく粉骨砕身、日々頑張っています。

そうそう、モロッコ人への指導に悩んだとき、フォレットという学者の本が参考になったので最後に記しておきます。フォレットによれば、人間関係の問題、つまりコンフリクト解決には逃避、対決、忍耐、統合の段階があり、お互いの良い部分を見出し認め合うことこそが解決に最適な方法とありました。なかなか異国の文化、風習等を理解するのは時間がかかるものですが、モロッコ文化の本質、内容を考え、吟味しながら彼らに理解しやすい方法で効果的に指導することが肝腎だとこの本を読んで感じました。モロッコ人の性格を考え、その悪い部分よりも良い部分を積極的に認めるようにしながら指導することが、彼らを正統な柔道へ導いていく鍵なのではないかと思っています。

ここまで拙文をご笑覧頂きましたが、どうやらだいぶ私の独断と偏見が入っているようです。そのような箇所は高邁かつ識見ある諸兄のご指導、ご鞭撻を仰ぎつつ、今回はここで筆を置きたいと思います。また、新しい発見がありましたらお便りしたいと思っております。

それでは、皆さまにおかれましては季節の変わり目でもありますのでご自愛のうえ、元気でお過ごし下さい。

敬具

関雅夫

